

ファイアー・フライ

高嶋哲夫

第一章 山と谷

1

路は相変わらず急な勾配で続いている。

一時間近く歩き続けていた。正確には四十七分。しかし、半日以上歩いた気がする。山の匂いが染み付き、草木の緑も網膜に焼き付いた。汗が額に滲み、シャツに染み込んでいる。ネクタイは山に入る前に外し、ポケットに押し込んだ。

四、五メートル先を登って行く男の長い脚とたくましい尻が、疲労をさらに深める。四十三歳の身にはすでに限界がきていた。脚がとづくに、いうことをきかなくなっている。

「ちよつと、休憩しようよ」

私の歩みが遅れ始め、息使いが乱れてきたのを察してか、後ろを歩く女が男に声をかけた。

女の声を聞くのはこれで三度目だ。「痛くない？」車の中で頭の傷の手当てをしたとき、無意識に発した言葉だ。そして、車を降りて歩き始めたとき、「頭痛がするならすぐに教えるのよ」と言った。医療について、かなりの知識と経験があるようだった。

彼らと一緒にになって十六時間余りたつが、その他に声を聞いたことはない。意識して声を聞かせまいとしているのだ。話すときは顔を近づけ、ぼそぼそ言い合っている。高速道路を下りたとき、ふたりで言い争ったが、その時も声をひそめ私の方をしきりに気にしていた。

男は無言で立ち止まり、ゆっくり振り向いて私を見た。陽に焼けた荒削りの顔は二十代後半か三十代にも見えたが、私を睨み付ける目には子供のような幼さを感じることもある。額に長さ四センチほどの傷跡があった。何か荒いもので擦られ、えぐられたような傷だ。まだそんなに古くはなさそうで、男の過去を想像させる生々しさを覚えた。

男は身体の半分ほどもあるリュックを下ろし、その上に腰を下ろした。私も草むらにへたり込んだ。丈の高い茅やしだで私の身体は半分埋まった。

女も、男のより少し小振りのリュックを下ろして深い息を吐いた。Tシャツの上に赤とブルーのチェックのワークシャツをボタンを外して着ている。その胸が呼吸とともに大きく前後に揺れた。

頭に鈍い痛みを感じる。その痛みは、鼓動に合わせて脳の芯から全身へと広がっていく。

女が寄ってきて、私の目の前に水筒を突き出した。私はその大型水筒に口を付け、むさぼり飲

んだ。

「慌てないで。飲みすぎるとよけい疲れるわよ」

女が呆れた顔で水筒を取り上げる。

男は腰の刃渡り三十センチはともあるナイフを抜いて、威嚇するように横の枝を切り落として  
いる。枝はまるで野菜のように抵抗なく落ちた。

「あと、三時間ほどだ」

男がぶつきらぼうな声を出した。若々しい声だ。私は男が二十代であることを確信した。

松の木にもたれ、大きく息を吐いていた。その間に女が額の傷の具合を調べた。包帯は傷に張  
り付いていて、はがすとき声を上げそうになった。

包帯を見て思わず房をそむけた。どす黒い血で固まっている。

「ごめんね。こんなに切れるとは思ってなかった」

女はクスリをつけながら謝った。額の左上が、三センチばかり切れている。かなり深いらしい。

「縫ったほうがいいんだけど、道具ないし、私じゃ無理だしね。本当は、歩くのもよくないのよ  
ね。でもきれいな傷だし、消毒したから問題ないと思う」

私に話すというより、自分自身を納得させるような言い方だった。

包帯を替えたあとで、アスピリンに似た白い錠剤を二錠くれた。

男は黙って見ていたが、立ち上がってリュックを開けた。アンパン二個とビスケットを出して

女に渡した。

「食つたら行くぞ。暗くなる前につきたいからな」

男は睨み付けるように言った。

疲れきっていて食欲はなかったが、無理に飲み込んだ。一瞬、吐き気が込み上げてきたが、すぐに消えた。ここはどこなのか、いつまで歩くのか、どこに行くのか、そしてなぜ私が……。喉元まで出かかった言葉をアンパンで封じ込めた。

私たちはふたたび歩き始めた。

山はさらに険しく、深くなっていく。木々の色が濃くなり、露出した根は厚い苔に覆われている。路はかなり前から消え、男は黙々と木々と草をかき分けながら進んでいく。不安はすでになかった。そんな余裕がないほど疲れていたのだ。

男は時々ナイフを抜いて、張り出している枝をはらった。槍先のような切り口が跳ね、思わず身体をかがめた。

私はほとんど体力のすべてを使い果たしていた。体中が重く、冷や汗が滲み出る。全身が熱っぽく、頭痛と軽い吐き気がした。

「少しは楽になるわよ」

女が背広を脱がし、持ってくれた。

私が遅れると、男は振り返り歩みを止めた。地面からむきだした木の根の上を歩くのに手こず

つてしていると、手を貸してくれた。手の甲は硬く、労働で鍛えられた私の倍もあるたくましい腕だ。尾根の巨大な石の上と、谷の途中の小さな流れの横で休んだだけで、歩き続けた。山が深くなるにつれて、空気の粒子が緻密で濃くなっていく。純粋な酸素と窒素、それに木々の出す不思議なエキスが混ざりあっている。

山中にたち込めていた熱を含んだ空気は、いつしかひやりとした夜の香りを漂わせていた。四時をすぎたところだが、木々を通ってくる光は弱々しく頼りない。

足元を見つめ、男が踏み開いた草の上を何も考えずたどった。思考を停止させるのが、疲れに打ち勝つ最良の方法であることに気づいた。体力の限界はとづくにすぎている。

「このトンネルを抜けたところだ」

突然、男が振り向いて言った。

私は顔を上げて前方を見た。トンネルという言葉に山の終わりを思ったのだ。

陽の落ちた山中はすでに薄暗く、前方には茂った木々が絡み合っているだけだった。ここから先に進むことは、山の終わりどころか、さらに深い山中に踏み入って行くことのように思えた。

男は長い腕を突き出し、絡み合った枝を左右にかき分けた。そして付いてくるよう目で合図して、その木々の中に入っていく。

一瞬ためらった。この穴に入れば、二度と戻ってこれない気がしたのだ。まだ判断力が残っているのが不思議だった。女が背中を軽く押した。私の脳にわずかに残っていた思考は消え、よ

ろめきながら木々の中に歩みを進めた。

陽の光はほとんど届いていない。腰をかがめ、男の歩くガサゴソという音を頼りに必死で木々をかき分けた。その壁はコンクリートや岩ではなく、木々でできたまさにトンネルだった。枝が跳ねて身体を打ったが、痛みは感じない。脳はすでに感覚をなくしている。いや、精神が麻痺しつつあったのかも知れない。

途中で木々が消え、周りはゴツゴツした湿った岩肌になっている。岩から落ちてくる滴が、首筋を濡らした。そして、すぐにまた木々が変わる。

十五分ほどで前を行く音が途絶えた。

私は慌てて歩みを早めた。急に目の前が開け、明るい空間が広がった。山のこちら側はまだ陽は落ちていない。

めまいを感じた。穴のような木々の中を通り抜けてきた目には、明るすぎる光だ。前方にはゆつたりとした谷が広がり、底の辺りに十戸ほどの家が見えた。

よく見ようと屈んでいた腰を伸ばした。その時、激しい痛みを感じた。それは頭の中心で起こり、頭全体に広がっていく。そして痛みがひいていくと共に、空白が広がる。目前の風景が急激に薄れ、大きく傾く。しかし、倒れる前に女が支えてくれた。

「タツちゃん、早く来て！」

男を呼ぶ声がかすかに聞こえる。

私の意識は、すい込まれるように消えていった。

目覚める前、誰かの声を聞いたような気がした。

いつもは目が覚めてから、しばらく床の中でぼんやりしている。低血圧なので、朝は血液が温まり身体中の毛細血管までいきわたるのに時間がかかるのだ。それからキッチンにいつて、自分でコーヒ―を淹れパンを焼く。妻と大学生の長女、予備校生の長男は、まだぐっすり眠っている。私が出てから起きて来るのだろうか。ここ数日は私が会社に泊まり込んでいたので、顔を合わせない。

自分がどこにいるのか分からなかった。

身体を起こそうとすると、鈍い痛みが頭の中に湧いてくる。

「動かないで」

私は身体を押さえられた。

若い女がのぞき込んでいる。

「あんがい早く気がついたわ。でも、半日眠っていたのよ」

女は私から身体を離して言った。

肩より少し長めの髪、切れ長の目と薄い唇。整った顔つきをしている。陽に焼けてはいるが、化粧をすれば美人の部類に入るのかもしれない。昨日はさほど意識しなかったが、Tシャツの胸

は大きく膨らんでいる。

身体を動かさそうとして、思わず眉をしかめた。

開けはなつた縁側から、明るい光が差し込んでくる。

女は私の額のタオルを換え、もう二枚のタオルで首筋を拭いてくれた。ひやりとしていい気持ちだった。

「ありがとう」

私の言葉に女はくすりと笑った。

「おじさんにお礼を言われるとは思ってもみなかった」

私の頭に徐々に記憶がよみがえってきた。しかし、まだ脳の半分には濁った水が溜まっているようだ。

【続きは書籍・文庫にてお楽しみ下さい】

注意

本作品の全部、または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償にかかわらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をすると著作権法、その他関連法によって処罰されます。